

アガサ・クリスティの田園

——アガサ・クリスティ作品から読み解く20世紀イギリスの
田園の変遷（1）1910年代から1930年代まで

坂 田 薫 子

序

パズルにも似た、娯楽としての謎解きが目的とされるアガサ・クリスティ (Agatha Christie) のミステリー小説は、人物描写が平板で、内容に深みがないという批評を受けることはあっても、いわゆる純文学に分類されることはなく、英文学史の正典として扱われることもないため、研究対象として論文に取り上げられることはまれである。しかし、処女出版作品の『スタイルズ荘の怪事件』(*The Mysterious Affair at Styles*, 1921年) から、第二次世界大戦中に書き上げ、金庫に保存してあった『カーテン』(*Curtain*, 1975年) と『スリーピング・マードラー』(*Sleeping Murder*, 1976年) を除き、いわゆる「最後」の作品となる『運命の裏木戸』(*Postern of Fate*, 1973年) まで、50年以上にわたって執筆活動が続けた彼女の作品を物語の時代設定順に読んでいくと、移りゆくイギリスの様子がはっきりと浮かび上がってくる。特に田園風景の移り変わりやロンドンの開発の様子、そしてそれに伴った人びとの生活様式の変化をうかがわせる描写は、20世紀のイギリス文化について学ぼうとする者にとって大変有意義なものとなっている。そこで本論文では、クリスティ作品に描かれた田園風景の変化の様子を年代順にまとめてみようと思う。その際、当然のことながら、同じ土地の描写を読み比べた方が、風景の変化がより一層分かりやすくなるため、ミス・マーブル (Jane Marple) の住むセント・メアリ・ミード村 (St. Mary Mead) については必ず触れながら、都会化していく田舎の様子、衰退していくカントリーハウスの様子を中心に分析していく。ただし、クリスティは多作で知られる作家で、文字数の制約上、1本の論文で全年代を網羅することは難しいため、まず本論文では第一次世界大戦中となる1910年代後半から、第二次世界大戦勃発直前の1930年代後半までを舞台とした作品を扱う。その際、推測可能な限り、物語の語りの現在の年代設定順で作品を並べていくため、出版の順番とは異なったり、出版年代とは異なるセクションで取り上げたりすることがある。なお、クリスティ作品はイギリスとアメリカでの出版の時期が異なることが多いが、原則として長編はイギリスで本として出版された年を示し、短編はイギリスで雑誌掲載された年を示すこととし、さらには可能な範囲で、それぞれの作品の舞台が設定されていると考えられる年代を示すこととする。各作品の年代設定については必要に応じて注を付けて解説するが、ミス・マーブル作品の年代設定については、拙論「『透明な批評』で読むアガサ・クリスティ——ミス・マーブルの履歴書(1) 年齢」(以後、「ミス・マーブルの履歴書(1)」と省略して記す) で論じているので、詳細はそちらを参照

されたい。

1. 第一次世界大戦の影響

——『スタイルズ荘の怪事件』(*The Mysterious Affair at Styles*) : ポワロ作品、1921年出版、1916年設定¹⁾

『カーテン』で第一次世界大戦中の1916年が舞台設定となっていることが明らかになる『スタイルズ荘の怪事件』には、戦争が人びとの生活、特にカントリーハウスの運営に与える影響が色濃く表れている。この物語は第一次世界大戦で負傷したヘイスティングズ (Hastings)²⁾が療養のために、知り合いの実家のスタイルズ・コート (Styles Court) があるスタイルズ・セント・メアリ村 (Styles St. Mary) を再訪するところから始まる。その際、ヘイスティングズの視点からは、この村は戦火で傷ついた者の心身を癒す場所としての田園、戦争という現実から逃避できる「理想郷」(27頁)としての田園として描かれている。

スタイルズ・セント・メアリ村はその小さな駅から2マイルほどのところに位置しており、スタイルズ・コートは駅の反対側に1マイル行ったところにあった。その日は7月初旬の静かな暖かい日であった。午後の日差しの中、あのように緑豊かで平和な様子で目の前に広がる平坦なエセックスの田園を眺めていると、それほど遠くはない場所で大戦争が定められた進路をたどっているとはほとんど信じられなかった。私は突然別世界に迷い込んだような気がした。(4頁)

それはちょうど、J・L・カー (J.L. Carr) の『ひと月の夏』(*A Month in the Country*, 1980年)で、第一次世界大戦の後遺症に悩まされる青年トム・パーキン (Tom Birkin) が心身の傷を癒すため、1920年の夏、ヨークシャーの田園を訪れた際に抱く印象に似ている。しかし、これはあくまでも戦争によって心身ともに傷を負った、よそ者であるヘイスティングズの視点による理想化でしかなく³⁾、彼の訪問する「カントリーハウス」(『カーテン』2頁)、スタイルズ・コートにも戦争の影響がはっきり示されている。

まず、戦争のせいではなく、1916年設定のため、お金持ちの住むカントリーハウスではあっても、スタイルズ・コートにまだ電気は通っておらず、壁の照明はガスによるものとなっている。部屋では灯油ランプやアルコール・ランプが用いられ、台所ではガス・ストーブが使用されている。まだ電話はないため、使用人が医者を呼びに行き、電報を打っている。移動手段として馬車も使われている。そして今ここは、第一次世界大戦中のため、様々な節約を余儀なくされている。ロウソク、ガスや灯油による照明を使わなくてもいいように、暗くなる前に夕飯をとる。使用済みの紙きれを取っておく。これが殺人事件を解く鍵の1つとなるのだが、マッチを節約するため、紙くずを燃って(暖炉からランプやたばこへの)点火用に使用している。時として車での移動が可能になっているのは、夫カヴェンディッシュ氏 (Mr. Cavendish) の死後、再婚し、スタイルズ・コートの女主人となったイングルソープ夫人 (Emily Inglethorpe) が慈善愛国活動に参加しているために、その対価としてガソリンの配給を受け取っているからである。健康な若者は皆戦争

に駆り出されているため、庭師は年寄りや女性のみとなっている。犯人の1人が正体を隠して近所の薬屋から毒薬を購入できたのも、徴兵により、従業員が交代したばかりであったためである。田園を理想化するヘイスティングズとは異なり、クリスティは出版処女作となるミステリー小説の背景に、すでに社会情勢に容易に左右される田園風景を描いているのである。

2. 1920年代——第一次世界大戦後

第一次世界大戦で未曾有の死傷者を出したイギリスの田園の村は、住民の高齢化が目立つようになる。また、多くの貴族やジェントリーが、ヴィクトリア朝時代から長く続く農業の不況による土地の価値の下落や、高額所得税⁴⁾などにより財政難に陥り、さらには法定相続人であった息子や兄弟を戦争で亡くした一家も多く⁵⁾、高額死亡税（相続税）も負担となり⁶⁾、自らの地所を手放さざるを得なくなる⁷⁾。そのため、これはヴィクトリア朝時代から見られていた現象ではあるが、イギリスの多くのカントリーハウスの所有者、あるいは居住者が、上流階級から、富を蓄積していった産業資本家へと変わっていった⁸⁾。このセクションでは、こうした田園風景の移り変わりが描かれている『アクロイド殺し』(*The Murder of Roger Ackroyd*, 1926年)と、続き物としてとらえることができる『チムニーズ館の秘密』(*The Secret of Chimneys*, 1925年)と『七つの時計』(*The Seven Dials Mystery*, 1929年)について分析する。

2.1. 『アクロイド殺し』(*The Murder of Roger Ackroyd*):ポワロ作品、1926年出版、1926年か1927年の設定⁹⁾

クリスティは『自伝』(*An Autobiography*, 1977年)で、『アクロイド殺し』ではシェパード医師(Dr. James Sheppard)とその姉(Caroline Sheppard)の人生を通してイギリスの村の生活を描いたと述べている(434頁)。ではクリスティの考える1920年代後半のイギリスの村の現状とはどういうものだったのだろうか。ポワロ(Hercule Poirot)は都会の喧騒から逃れるため、引退の地として「[イギリスの]どこにでもあるような村」(7頁)であるキングズ・アボット村(King's Abbot)を選ぶ。しかし、一見理想の田舎の村のように思われる、この「どこにでもあるような村」は、ポワロが引退の地として選んだことが示唆するように、高年齢者ばかりが目立ち、過疎化が進んだ田舎として描写されている。

私たちの村、キングズ・アボットは、おそらく、他のどんな村とも大して変わらないと思う。私たちにとっての大きな町はクランチェスター(Cranchester)で、9マイル離れたところにある。私たちの村には大きな鉄道の駅、小さな郵便局、ライバル同士の2つの「よろず屋」がある。健康な男たちは若いうちにさっさとここから出て行きがちだが、未婚女性と引退した軍人なら大勢いる。私たちの趣味と気晴らしは「噂話(ゴシップ)」という一語で要約することができるだろう。(7頁)

クリスティの処女出版作である『スタイルズ荘の怪事件』においてすでに、舞台となるカントリーハウスを運営するのは旧家出身の当主ではなかった——先代のカヴェンディッシュ氏が再婚

後にスタイルズ・コートを購入したことになる——が、『アクロイド殺し』でも、ポワロが「美しい地所だ」(104頁)と感嘆するファーンリー・パーク (Fernly Park) に建てられた大邸宅ファーンリーに住むアクロイド (Roger Ackroyd) は、代々この地に住み、伝統の担い手となっている貴族やジェントリーの一員ではなく、荷馬車の車輪の製造で財をなした産業資本家である。シェパード医師が「荷馬車の車輪の製造だと思ふ」(8頁、強調は筆者によるもの)と述べ、資産家アクロイドの商売の詳細を知らないことから、アクロイド家は当地で商売をしているのではないらしい。また、義理の息子しかいないアクロイドの経営する会社名がアクロイド・アンド・サン社 (Ackroyd and Son) であることから、アクロイド家の商売は彼の父が、あるいは、馬車が交通手段だったころに彼らの祖先が始めたものと思われる。まだ50歳になっていないアクロイドがすでに引退しているとも思えないので、製造業は創業の地で行われていて、アクロイドは20年ほど前に結婚を機にキングズ・アボット村に越して来たのだろう。そのために、キングズ・アボット村の住人はアクロイドの義理の息子子どもをこのころから知っているという設定になっているのではないだろうか。

ただし、『スタイルズ荘の怪事件』では、イングルソープ氏と再婚した元カヴェンディッシュ夫人は(多少の皮肉が込められているとしても)「お金持ちの女性慈善家」(2頁)と呼ばれるほど慈善愛国活動を行うことを好み、詳しい描写はないものの、スタイルズ・コートでは多くの催し物が開かれ、そこが人びとの社交の場となっていたことが推測されるうえ、近隣の者たちがスタイルズ・コートの関係者に不利になる証言をすることにためらいを覚えている様子から、この作品ではまだ、親族縁者を越えた人びとの社交の場としてのカントリーハウスの機能が失われていないことがうかがえる。しかし、『アクロイド殺し』では、教区に気前よく献金をしていて、「平和なキングズ・アボット村の中心人物」(8頁)だったにもかかわらず、K・D・M・スネル (K.D.M. Snell) が指摘するように(47頁)、屋敷の当主のアクロイドが殺されても、村の人びとはゴシップに興じるだけで、彼の死を悼む様子はまったく感じられない。少しずつ、しかし確実に、カントリーハウスは代々その土地に住む一家が所有する、地域の中心をなす場所から、お金持ちが住む、単に広大なだけの1つの住宅へと変化しつつあることがうかがえる。

2. 2. カントリーハウス、チムニーズ (Chimneys) の変化

2. 2. 1. 『チムニーズ館の秘密』 (*The Secret of Chimneys*) : 1925年出版、1920年代前半設定か

『チムニーズ館の秘密』とその続編となる『七つの時計』で主要な舞台の1つとなるのは、「歴史上重要な」(『チムニーズ館の秘密』23, 102頁; 『七つの時計』9頁) カントリーハウス、チムニーズ (Chimneys) である。ここはケイタラム侯爵 (Marquis of Caterham) 家の由緒正しい屋敷で、そこには歴代の当主の肖像画が飾られている。「歴代の王や女王が週末に訪れ、外交官たちが集まり、外交を繰り広げ」(『チムニーズ館の秘密』21頁)、「これまで1度か2度歴史が作られた」(『チムニーズ館の秘密』173頁; 『七つの時計』111頁) 場所となっているこのカントリーハウスの現在の当主は第9代ケイタラム侯爵 (Lord Caterham, Clement Edward Alistair Brent, ninth Marquis of Caterham) で、そこには「聖職者の巣穴」があることから、チムニーズはエリザベス一世統治下の近世時代、あるいはそれ以前から存在していることがうかがえる。

しかし、一見盤石に見える侯爵家の生活も、第一次世界大戦の負の影響を免れない。チムニーズはあらゆるガイドブックに載っており、毎週木曜日にその一部が公開され、コーチバスに乗って訪れる観光客たちは21シリング払って、執事の説明に熱心に耳を傾け、聖職者の巢穴や秘密の通路を見て興じている。ケイタラム卿は『チムニーズ館の秘密』の事件の2年後に¹⁰⁾チムニーズを用人込みで貸し出すという決断を下すことになるのだが、それ以前からすでに、傾き始めていた財政を立て直すため、様々な努力を重ねることを余儀なくされていることがうかがえる。物語の最後で、「そんなにチムニーズが国にとって価値があると言うのなら、国に買ってもらうんじゃないか。そうでなければ、どこかの企業にでも売り払ってしまうから、そうしたければホテルにでもすればいいんだ」(328頁)と嘆くケイタラム卿の「今どき、貴族でいたい人間なんていない」(108頁)というつぶやきは、紛れもない本音なのかもしれない。

2. 2. 2. 『七つの時計』 (*The Seven Dials Mystery*) : 1929年出版、1920年代後半設定か

『チムニーズ館の秘密』の4年後の設定となる『七つの時計』では、カントリーハウスの貸し借りを通して、貴族の困窮と産業資本家の富の蓄積がより明確に記されている。デイヴィッド・キャナダイン (David Cannadine) によると¹¹⁾、第一次世界大戦後、貴族たちは財政難を乗り切るために「カントリーハウスを貸し出したり、狩りを縮小したり、ロンドン・シーズンを諦めたり、しばらく海外に居住することを真剣に考えたりした」(98~99頁)というが、ケイタラム卿もおそらく財政難から、チムニーズを用人込みで、2年間、ヨークシャー出身の鉄鋼王、サー・オズワルド・クート (Sir Oswald Coote) に、他の人ではとても払えないような高額で貸し出したのだらう¹²⁾。

チムニーズを借り上げるサー・オズワルドは一代で鉄鋼で財をなし、その妻は彼が若いころ働いていた自転車屋の隣の金物屋の娘という典型的な「叩き上げ」(39頁)の成功者という設定である。サー・オズワルドは生粋の貴族であるケイタラム卿に、自らが築き上げた大企業の(年に1回か2回、ロンドンでの会合に出席するだけの)名ばかりの役員になってもらったのを機会に、屋敷を借りることになる。キャナダインによると、カントリーハウスの経営難に陥った当主たちの中には役員報酬によって収入を増やそうと、企業の「お飾りの」(393, 407, 417頁)、あるいは「名目上の」(407頁)役員になる、つまり、「自分たちの爵位を売る」(419頁)者が多くいたというが、おそらくケイタラム卿もそうした当主の1人なのであろう。しかし、当時、商売に関しては経験不足だった彼らは「質の悪い会社のプロモーターたちのカモになり、スキャンダルや金銭的損失に巻き込まれる」(キャナダイン 393頁)こともあったため、安全な会社を選ぶように注意していたというので(キャナダイン 417頁)、ケイタラム卿は闇雲に役員職に飛び付いたわけではなさそうである。貴族やジェントリーたちは19世紀初頭から自分たちの所有する土地にとって重要な運河会社や鉄道会社の株主や役員になっていたというから(キャナダイン 407頁)、ケイタラム卿は鉄鋼業を営むサー・オズワルドとは地所チムニーズの運営を通して以前からの知り合いで、安心して役員職の提案を受け入れたのではないだろうか。

サー・オズワルドがいつ爵位を与えられたのかは不明だが、石炭、造船、その他の重工業の業界の大物となった新興財閥のメンバーたちの中には、大きな地所は所有していないものの、1910年までに貴族の称号を授けられた者が多くいたというキャナダインの説明(407頁)¹³⁾が、鉄鋼業

で一財産を築いたサー・オズワルドにも当てはまりそうである。サー・オズワルドはチムニーズとの契約終了後は、オールトン公爵 (Duke of Alton) の屋敷を3年間借りる契約を結ぶが、称号は得たものの、まだそれに見合う大きな地所を所有していないため、いつか自分の屋敷を手に入れることを望んでいる。サー・オズワルドが屋敷の所有にこだわるのは、レディ・クート (Lady Maria Coote) が嘆くように、自分の成功を周囲に見せびらかしたいだけで、まさにソースタイン・ヴェブレ (Thorstein B. Veblen) の言う「顕示的 (見せびらかしの) 消費 (conspicuous consumption)」にすぎないのかもしれないが、それは「田園の土地を手に入れることがいまだに多くの人びと、特に中産階級出身の人びとから見て、成功の望ましい附属物と見なされていた」(エイドリアン・ティニスウッド (Adrian Tinniswood) 『週末』215頁) 当時、至極もったもなことであり、彼の欲望は、富の象徴であるカントリーハウスの住人、あるいは所有者が、時代の移り変わり、そして富の所有者の移り変わりに伴って、貴族から産業資本家へと変わっていった当時の様子を物語っている。そうした中、ケイタラム卿の娘のバンドル (レディ・アイリーン) (Bundle (Lady Eileen Brent)) は、ブレント家のような生粋の貴族の家系に代わって、成り上りのクート家のような人びとがイギリスにあふれることになる未来像に落胆を隠せない。

「オールトン公爵の地所を借りる予定なんです。3年間の契約で。自分の地所を物色している間のことだけですが。あなたのお父様は売りたいくても売れないんでしょうね？」

バンドルは息をのんだ。彼女は数えきれないほどのクート家のような人びとが、数えきれないほどのチムニーズのような屋敷——絶対に、どこも完全に新しい上下水道設備付きなのだろう——に住んでいる、悪夢のようなイングランドの姿を想像した。

彼女は突然激しい憤りを感じたが、そうした憤りを覚えるのはばかげていると自分に言い聞かせた。結局のところ、ケイタラム卿とサー・オズワルド・クートを比べてみれば、どちらが敗北者となるのかには疑いの余地はなかった。(146頁)

しかし、たとえそれが産業資本家であっても、カントリーハウスがその原型をとどめたままで個人の所有者の手に移っていくのならまだましである。地所を運営するための維持費は法外で¹⁴⁾、カントリーハウスを含む広大な地所をそのまま買い上げることは、富を蓄積した産業資本家にもたやすいことではなかった。G・E・ミンゲイ (G.E. Mingay) によると、1914年以降、維持、管理、改良にかかる経費など、地所を運営する費用はかさんでいき、土地の賃貸による収入の約3分の1を消耗し、1921年ごろまでには5分の3もの収入を消耗したという (208頁)。そのため、ロンドンから車で1時間程度の小さめの物件の需要は高かったものの (ティニスウッド『週末』35頁)、広大な物件に買い手は見つからず、1920年代には個人の買い手に売られる傾向にあったカントリーハウスは、1930年代までには、施設団体に買われたり、学校やホテルやフラットに改造されたりすることの方が多くなった (キャナダイン 118頁)¹⁵⁾。ピーター・マンドラー (Peter Mandler) によれば、2つの世界大戦の間、カントリーハウスはしばしば近代化を妨げる過去の遺物として表象され、取り壊され、そこに住宅や道路や公園のような、人びとにとって本当に必要なものが造られたり、病院、学校、フラット、ホテルのような、近代的で役に立つものに改造されたりしたとのことである (258頁)¹⁶⁾。クリスティ作品でも、例えば、『白昼の悪魔』(Evil

under the Sun、1941年)の舞台となるホテルは海岸リゾートブームに乗って1922年に大邸宅から改造されたことになっているし、『五匹の子豚』(*Five Little Pigs*、1943年)では、小説の現在よりも16年前に事件が起こった田園の大邸宅が現在は大きく改装され、ユースホテルに様変わりしていることになっているが、マーク・アルドリッジ (Mark Aldridge) によると、『五匹の子豚』の原稿は1940年に完成したというので(168頁)、小説の現在は1930年代後半と考えられ、マンドラーが指摘するカントリーハウスの変遷と一致している。さらに、キャナダインによると、1880年代以降徐々に、そして第一次世界大戦以降はもっと目立って、多くのカントリーハウスが部分的に取り壊されたり、パークと一緒に売りに出されたりするようになり、買い手が見つからない際には完全に取り壊されたという(118頁)¹⁷⁾。『七つの時計』において、バンドルはカントリーハウスを訪れるそうした未来がそう遠くないことを家政婦のミセス・ハウエル (Mrs. Howell) に向かって予言してみせる。

「ミス・バンドル、私はまさか部外者がチムニーズで生活するのを目にする日が来るとは夢にも思っていませんでした」

「あら！ 時代の変化についていかなきゃだめよ」とバンドルは言った。「ハウエリー、そのうちチムニーズが豪華な公園 (プレジャー・グラウンド) 付きの素敵なフラットに改造されるのを見ないで済んだら恵まれているわよ」

保守的で貴族的なミセス・ハウエルは背筋が寒くなった。(106頁)

クリスティはケイタラム卿の進退、サー・オズワルドの思惑、そしてバンドルの予測するカントリーハウスの未来像に、実に忠実に当時のカントリーハウスを巡る現状を写し取っていることがうかがえる。

3. 1930年代前半

1930年代に入るとクリスティ作品では宅地開発が進み、これまでとは異なったタイプの住民たちが田園に入って来る描写が目立つようになる。このセクションではその様子を1930年代前半が舞台となっているミス・マーブル作品のセント・メアリ・ミード村の描写から考察してみる。すると、ミス・マーブルの住むセント・メアリ・ミード村はイングランドの古き良き理想の田園のように語られがちだが、時代の流れとともにその風景を少しずつ、しかし確実に変化させていることが明らかになる。また、このセクションの最後に、カントリーハウスの所有者の変化という視点から、1930年代前半を舞台としているポワロ作品も1つ取り上げておく。

3.1. 『牧師館の殺人』(*The Murder at the Vicarage*) : ミス・マーブル作品、1930年出版、1929年か1930年の設定¹⁸⁾

1930年前後を舞台とした『牧師館の殺人』に描かれるイングランドの村、セント・メアリ・ミードにも、セクション「2.1.」で取り上げたポアロ作品、『アクロイド殺し』のキングズ・アボット村とほぼ同質の変化が生じている。例えば、牧師館のメイドのメアリ (Mary Hill) のマナー

の悪さと能力のなさに端的に示されているように、明らかに使用人たちの質が落ちてきている。メアリが牧師館での仕事をより高額な賃金を稼ぐことができる仕事への足掛かりとしか考えていないことを知っているクレメント牧師夫妻 (Leonard Clement and Griselda Clement) は、彼女の怠惰で不遜な態度をあえて改めさせようとはしない。なぜならば、雇用主たちは、使用人の数が減少している中、なんとか使用人のなり手を見つけることができて、その使用人を教育し、よい使用人に育て上げると、よりよい条件の家に引き抜かれてしまうというジレンマを抱えているからである。ルーシー・レスブリッジ (Lucy Lethbridge) はこうした1930年代の中産階級の家庭の悩みを、

1937年までにイギリスには160万人もの失業者がいたが、それでも、イングランドの中産階級の家庭では、使用人の離職が2つの世界大戦の間の年月を特徴づける心配事となっていた。使用人たちをなだめなければならないこと、使用人たちの優位な交渉力を目の前にして身を震わすことが、変化していく世界を証明する印となった。〔中産階級の〕女性たちはまだに自分たちを使用人たちの気まぐれに振り回される殉教者と見なしており、ひどい料理や不機嫌さを目の当たりにして、無力さを感じ、びくびくしていた。(220頁)

と描写している。レスブリッジのまとめる中産階級の女性たちの苦悩は、グリゼルダ・クレメントの感じているジレンマと面白いほど一致している。彼女の悩みを一人称で語ったとしたら、それはちょうど、使用人の機嫌を損ねないように気を使い、新しい使用人を見つけるのに四苦八苦する様子を綴る、E・M・デラフィールド (E.M. Delafield) の『地方に住むある淑女の日記』(*The Diary of a Provincial Lady*, 1930年) の「私」の日記ができあがることだろう。クレメント牧師夫妻 (や、プロヴィンシャル・レディ) のこうした悩みは、拙論「『透明な批評』で読むアガサ・クリスティ——ミス・マーブルの履歴書(2) 人物相関図」(以後、「ミス・マーブルの履歴書(2)」と省略して記す) のセクション「3.3.1.」で論じたように、第一次世界大戦後、他の仕事に就くことが可能になってくると、女性たちは住み込みの仕事をすることを嫌うようになったため、よい使用人を見つけることは難しくなっていき、雇用主は貧困にあえぐ地域や、救貧院や孤児院などから家事奉公人を募らねばならなかったという現実を写し出している¹⁹⁾。

セント・メアリ・ミード村の近隣には2つのカントリーハウスが存在する。そのうちの1つが『牧師館の殺人』に初登場するオールド・ホール (Old Hall) である²⁰⁾。この邸宅には殺人事件の被害者となるプロズロー大佐 (Colonel Lucius Protheroe) が家族とともに住んでおり、執事、家政婦、料理人、パーラーメイドやキッチンメイドなどのメイドたち、プロズロー大佐付きの従僕、プロズロー夫人 (Anne Protheroe) 付きのメイド、お抱えの運転手が登場し、また、何頭もの馬を飼っていることから、おそらく馬丁もいると考えられ、多くの使用人を抱えている。ミス・マーブルの家の前に広がる森林地がその地所の一部となっており、(偽者ではあったものの) 考古学者が発掘に来るような塚があったり、近隣の若者がキジを密猟したりと、サウス・ロッジとノース・ロッジという2つの門番小屋があるほど広大なカントリーハウスである²¹⁾。その広大さは『書斎の死体』(*The Body in the Library*, 1942年) で、ミス・マーブルがオールド・ホールの庭師が6人の下男とともに地所を管理していたときのことを振り返っていることからもうか

がえる。

しかし、プロズロー大佐がオールド・ホールに引っ越して来たのは最初の妻に逃げられたあととなっていることから、1910年代後半が舞台となる『スタイルズ荘の怪事件』や、1920年代後半が舞台となる『アクロイド殺し』同様、ここでもカントリーハウスは当地で代々当主を務めてきた一族によってではなく、外部から来た「よそ者」によって所有されている。それも、その当主が村民たちからひどく嫌われ、物語はクレメント牧師の「プロズロー大佐を殺してくれる人がいたら、広く世の中に奉仕することになるだろう」（1頁）という聖職者らしからぬ発言から始まるのであるから、カントリーハウスの所有者のモラルが「ノブレス・オブリージュ（noblesse oblige）」の精神からほど遠くなっていることが分かる。セント・メアリ・ミード村は古き良き理想の村であるかのように語られがちだが、ミス・マーブルの初めての長編小説の時点ですでにこの村も、使用人問題やカントリーハウスの所有者の変遷などといった、時代の流れに沿った変化を余儀なくされていることを見逃してはならない。

3. 2. 「溺死」(“Death by Drowning”) : ミス・マーブル作品、1931年出版、短編集『13の謎』(*The Thirteen Problems*, 1932年)収録、1929年から1931年の間の設定²²⁾

セント・メアリ・ミード村に「今どきの」(233頁)若い建築家サンドフォード(Rex Sandford)がロンドンからやって来て、「最新の」(234頁)材料を使って、アリントン(Allington)氏のために「奇妙な」(234, 245頁)住宅を建てる。作家レイモンド・ウエスト(Raymond West)の著すモダニズム作品がセント・メアリ・ミード村の人びとによって必ずしも好意的に評価されていない——『牧師館の殺人』でクレメント牧師は「彼〔レイモンド〕の本は尋常ではないほど退屈な生活を送っている不愉快な人びとについての話である」(195頁)と描写し、「ミス・マーブルの思い出話」(“Miss Marple Tells a Story”、短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』(*Miss Marple's Final Cases*, 1979年)収録、1934年ラジオ放送、1935年雑誌掲載)でミス・マーブルは「レイモンドはどれもどちらかと言うと不愉快な若い男の人たちや女の人たちについてのとてもモダンな本を書いています」(97頁)と述べている——ことから、モダニズムがミス・マーブルから、そしてクリスティから諸手を挙げて歓迎されているわけではないことは明らかである。ところが、セント・メアリ・ミード村は「よんどだ水たまり」(『牧師館の殺人』196頁)だと公言し、常に上から目線のレイモンドがセント・メアリ・ミード村にやって来るのはそれほど頻繁なことではないし、彼の作品はわざわざ購読しない限り、その「不愉快な」登場人物たちが村人たちの心を乱すことはないが、新進気鋭の建築家サンドフォードが建てた住宅は、常に道行く人の目に留まるはずで、否応なしにセント・メアリ・ミード村にも忍び寄る都会化、止めることのできない時代の移り変わりを村人たちに意識させるに違いない。

3. 3. 『書斎の死体』(*The Body in the Library*) : ミス・マーブル作品、1942年出版、1930年から1932年の間の設定²³⁾

『書斎の死体』と『鏡は横にひび割れて』(*The Mirror Crack'd from Side to Side*, 1962年)で、セント・メアリ・ミード村の近隣にある、もう1つのカントリーハウス、ゴシントン・ホール(Gossington Hall)についての詳細が明らかになる。ゴシントン・ホールはセント・メアリ・ミ

ド村から1.25マイルから1.5マイルほど離れた場所にある「カントリーハウス」(60, 74頁)で、ヴィクトリア朝時代に建てられたものである²⁴⁾。このあたりで「最も大きな邸宅」(『鏡は横にひび割れて』80頁)であるゴシントン・ホールにはいくつか棟があり、当主であるバントリー大佐(Colonel Arthur Bantry)は執事、料理人、3人以上のメイド——『書斎の死体』にはファースト・ハウスメイド、セカンド・ハウスメイド、サード・ハウスメイドが登場し、短編「溺死」にはパーラーメイドが登場している——、お抱えの運転手など、大勢の使用人を抱えている²⁵⁾。地所内にはいくつも農場があり、そこを運営している農夫の住む農家もある。また、『鏡は横にひび割れて』によると、ゴシントン・ホールでは「狩りと釣り」(27頁)ができるというので、敷地内のパークには狩りができるような狩場と、釣りができるような川や池があることが分かる。実際にミス・マーブルは『スリーピング・マörder』でゴシントン・ホールを訪問した際、バントリー大佐が猟銃を手に、猟犬を連れて出かけようとしているところに遭遇する。家族の肖像画が飾られている、など、伝統を感じさせ、ゴシントン・ホールはいわゆる上流階級のカントリーハウスとして登場している。『鏡は横にひび割れて』によると、バントリー大佐は引退後にこの地所を購入し、引っ越して来たのであって、先祖から引き継いだわけではない。『牧師館の殺人』でオールド・ホールの当主だったプロズロー大佐同様、バントリー大佐も当地で代々当主を務めてきた旧家の出身ではなく、外部から来た「よそ者」でしかない。ただし、プロズロー大佐とは大いに異なり、周囲の人びとにとってバントリー大佐は「ジェントリー」(10, 12頁)を体現する存在となっている。

デイヴィッド・マトレス(David Matless)によると、2つの世界大戦の間にイギリスには400万軒を超える家が建てられ、1927/8年から1933/4年の間に毎年平均3万8,000エーカーが宅地開発され、1934/5年から1938/9年の間には5万エーカーに増大したという(57頁)。また、マンドラーによると、第一次世界大戦前にすでに都会は過密状態に陥り、スプロール現象が生じており、その結果、2つの世界大戦の間に、人口は10パーセントしか増加していないのに、イングランドの住宅は30パーセントも増加したという(229頁)。こうした当時の住宅事情を反映するかのようになり、セント・メアリ・ミード村からゴシントン・ホールに向かって4分の1マイルのところでも宅地開発が進んでいる。そこには、中身は「近代的な文明の利器」(21頁)であふれているのに、外観はチューダー朝を模した(「まがい物のチューダー様式の(sham Tudor)」(21頁))、「恐ろしく近代的な建物」(21頁)が建てられている。建築者によって「チャッツワース」という仰々しい名前の付けられたその「コテッジ(萱葺き屋根の田舎家)」(21頁)——ただし、ハーバー警視(Superintendent Harper)は「バンガロー(平屋住宅)」(136頁)と呼んでいる——には、セント・メアリ・ミード村の近くにできた映画撮影所に勤めている今どきの若者バジル・ブレイク(Basil Blake)が住んでいる。ここでは若者たちが深夜にパーティーを開き、泥酔し、大声でわめいたり、歌ったりし、女性たちは下着や裸でいる姿が目撃され、セント・メアリ・ミード村の住人たちは、風紀の乱れに苦言を呈している。こうした宅地開発は何もセント・メアリ・ミード村に限ったことではなく、被害者の1人、パメラ・リーヴス(Pamela Reeves)の両親はここ20年に退役軍人や退職した公務員のために田園に次々と建てられた「ヴィラ(庭付きの郊外住宅)」(123頁)に住んでいる。

実は、ブレイクの住むこのコテッジの描写にも、現実のイングランドの田園風景を忠実に写し

出そうとするクリスティの執筆の姿勢がうかがえる。2つの世界大戦の間の理想の住居像について分析したデボラ・サッグ・ライアン (Deborah Sugg Ryan) の研究書によると、「2つの世界大戦の間のイギリスでは、チューダー朝が特別な魅力を持っており」、「投機的な建築業者たちのチューダーエリザベス時代様式 (Tudorbethan) が2つの世界大戦の間の郊外を最も特徴づける建築様式であった」(22頁) という²⁶⁾。「チューダーエリザベス時代様式 (Tudorbethan)」とは、「チューダー王朝時代とエリザベス一世女王時代の特徴の混合物を大まかにもとにしている合成建築様式を描写する造語」(145頁) で、当時の批評家たちには「まがい物の (sham)」、「ふりをした (mock)」、「偽の (bogus)」などといった形容詞やあだ名を付けられ、けなされたそうである (145頁)。ただし、「半戸建住宅 (a semi-detached house)」だけでなく、バンガローでも人気が高かったチューダーエリザベス時代様式は (149頁)、網枝やしっくいなどを使った複製などではなく、最新の材料で建てられており (146頁)、省力化を図った技能と技術による設備の整ったモダンな住居であったという (150頁)。いわば娯楽のための架空の小説でありながら、このように時代の流行をリアルタイムで反映させた設定に、当時の読者はリアリティを感じながらクリスティ作品を楽しんだに違いない。

また、マジェスティック・ホテル (Majestic Hotel) のテニスコーチ兼ダンサーのレイモンド・スター (Raymond Starr) が語る／騙るデヴォンシャー (Devonshire) の名家スター家の没落の話は、零落していく当時の上流階級の姿を垣間見させる。

「君はアルスモンストン (Alsmonston) のスター家の一員なんですか？ そうとは知りませんでした」

「そうですね——分からないでしょうね」

彼の声には少しばかり苦々しさが混じっていた。

サー・ヘンリー (Sir Henry Clithering) はまごついて言った。

「運が悪かったですね——その——いろいろと」

「代々300年もの間所有していた地所を売り払ったことが、ですか？ そうですね、かなり運が悪かったですね。それでも、私たちのような人間はきっと消えていく運命なんです。私たちはもうお役目ごめんなんですよ。兄はニューヨークに行きました。出版業界で働いています——うまくやっています。残りの家族は世界中に散り散りになっています。確かに最近では、パブリックスクールで教育を受けたこと以外にこれと言って自分について語ることがないようでは、仕事を見つけることは難しいですよ！ 運がよければホテルの受付係として雇ってもらえることもあるでしょう。そこでは出身校とマナーがとても役に立ちますから。私が手に入れることができた唯一の仕事は配管工事会社のショールームでの販売員の仕事でした。〔中略〕しかし、〔中略〕解雇されました。

「私にできることと言ったら、ダンスとテニスしかありませんでしたから、リビエラのホテルに雇ってもらいました。そこでは結構な儲けがありました。うまくやっていたと思います。しばらくしてある高齢の大佐、本物の高齢の大佐で、信じられないほど年を取っていて、骨の髄までイギリス人で、いつもプーナのことを話していましたが、彼の話を持ち聞きしてしまいました。彼はマネージャーのところに行って、大声で言いました。

「『あのジゴロはどこだ？ あのジゴロに用があるんだ。〔中略〕』」

レイモンドは続けた。

「気にするなんてばかげていますが——でも、嫌でした。嫌になってその仕事を辞めて、ここに来ました。給料は減りましたが、前よりも楽しいですよ。たいていは、絶対に、何があっても、決してテニスが上達することはない、丸々と太った女性たちにテニスを教えています。それから、忘れられて壁の花になってしまっている、お金持ちの顧客のお嬢さんたちとダンスをします。まあ、仕方がありませんよね、それが人生なんでしょう。現代の運の悪い話だと勘弁してください！」

彼はそう言って笑った。(162～163頁、強調は原典によるもの)

キャナダインの第9章「有閑階級から働く貴族へ」に詳しいように、第一次世界大戦後の大恐慌から第二次世界大戦勃発までの間、地所を含む財産を手放さざるを得なかった名士たちは、当然のことながら、別の収入源を見つける必要に迫られた。(セクション「2. 2. 2.」で触れた『七つの時計』のケイタラム卿のように) 名ばかりの役員になったり、自ら商売に乗り出したり、女相続人を物色したり、伝記を書いたり、皆それぞれ様々な努力をしたが、どうしても生計を立てられない者たちは地位を失い、没落していくしかなかった。キャナダインはそうした「没落した貴族」(406頁)のなれの果ての姿として、P・G・ウッドハウス(P.G. Wodehouse)の小説を例に、「ゴシップ・コラムニスト、ナイトクラブのダンサー、ミュージック・ホールの歌手」(406頁)を挙げている。レイモンドがスター家の一員になりすましていても、彼を怪しむ者が誰もいない様子は、キャナダインが挙げる例に似て、ホテルのテニスコーチやダンサーに落ちぶれている(ということになっている)彼の語る／騙る身の上話がいかに当時信憑性を帯びたものであったのかをほのめかしている。

3. 4. 「申し分のないメイド」(“The Case of the Perfect Maid”) : ミス・マーブル作品、1942年出版、短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』収録、1930年代前半の設定²⁷⁾

『牧師館の殺人』に登場したオールド・ホールは、プロズロー大佐の死後、おそらくプロズロー夫人の代わりに、娘のレティス(Lettice Protheroe)がその相続人となったと思われる。しかしレティスは余命宣告を受けていた実の母親と外国に旅立ち、彼女を看取ったあと、不幸な思い出しかなかったオールド・ホールに戻ることはなく、ここを売り払ったようだ。「申し分のないメイド」で描かれるその後のオールド・ホールの「地主(landlord)」(82頁)は「彼」(82頁)という代名詞で示される「企業投資家」(81頁)である。そして今、オールド・ホールは、この企業投資家によって4つのフラットに改装されて貸し出されている——「オールド・ホールは森林地や、田舎の大邸宅の周囲に広がる緑地(パークランド)に囲まれた大きなヴィクトリア朝時代の邸宅であった。そのままでは貸すことも売ることもできそうにないことが分かっていたので、ある企業投資家が、どこでも熱湯が使える設備を整え、借家人たちが『庭園(グラウンド)』を共有して使えるようにして、4つのフラットに分割した」(81頁)。さらにフラットの「又貸し」(92頁)についても触れられている。フラットに住む若いカップルが一晩中音楽をかけ、食事の時間も決まっていない様子にも時代の変化がうかがえる。また、ここでも使用人、特に田舎で若い女

性を雇うことの難しさが描かれる。使用人斡旋所の存在や、使用人を雇うことがあまりに難しくなったため、よほどのことがない限り、雇い主は使用人を解雇することはない（できない）現状が描かれており、「申し分ないメイド」ではそれが犯罪に利用されることになる。

3.5. 「昔ながらの殺人事件」(“Tape-Measure Murder”) : ミス・マーブル作品、1942年出版、短編集『ミス・マーブルの最後の事件簿』収録、1935年前後の設定²⁸⁾

セント・メアリ・ミード村はロンドンで商売に成功し、ある程度の財をなしたあと、引退して退職後の生活を楽しむ場所として描かれている。この描写はセクション「2.1.」で論じた『アクロイド殺し』のキングズ・アボット村を想起させる。今後の論文で詳しく論じる予定の『鏡は横にひび割れて』で明らかになるように、第二次世界大戦後の大規模な宅地開発により、セント・メアリ・ミード村の周辺には新人類の若者たちが流入して来ることになるのだが、ポワロが去ったあとのキングズ・アボット村にも同様の未来が訪れるのかもしれない。

3.6. 『三幕の殺人』(*Three Act Tragedy*) : ポワロ作品、1935年出版、1933年設定²⁹⁾

この作品には、元は15世紀に建てられた寺院であった（そのため、セクション「2.2.」で取り上げたカントリーハウス、チムニーズ同様、秘密の通路が半マイル先の石造建築物までつながっている）ヨークシャーの大邸宅メルフォート・アベイ (Melfort Abbey) が登場する。ここは寺院であったころの姿を残しながら、その後ある時点で改修され、新しい棟が付け加えられた状態で、15年前にサー・バーソロミュー・ストレンジ (Sir Bartholomew Strange) に購入され、彼によってさらに改修され、物語の現在に至っている。サー・バーソロミューは著名な神経疾患の専門医で、最近（おそらく、医学での功績を称えられ、）ナイト爵を授与されたばかりである。彼は地所メルフォート・アベイの敷地内に「モダンな」(99頁) サナトリウムを建て、共同経営している。サナトリウムは邸宅からは見えず、それ独自の敷地に囲まれている。サー・バーソロミューの出自は不明だが、彼もまた、これまで考察してきたカヴェンディッシュ、アクロイド、プロズロー大佐、バントリー大佐同様、彼の代に当地に新しく越して来た「にわか当主」であることがうかがえる。

4. 1930年代後半

1930年代後半になると、ますます宅地開発が進んでいく様子と、カントリーハウスの所有者の階級の変移が描かれる。このセクションはポワロ作品を中心に、1930年代後半を舞台にしている（と思われる）作品を取り上げ、該当箇所を考察していく。

4.1. 『ABC殺人事件』(*The ABC Murders*) : ポワロ作品、1936年出版、1935年設定³⁰⁾

田園の宅地開発が進み、新興住宅地が増えている様子が顕著になる。海岸沿いの町ベクスヒル・オン・シー (Bexhill-on-Sea) に住むバーナード (Barnard) 家のバンガローは最近投機家によって建てられた50軒近くの住宅の1つであるし、サー・カーマイケル・クラーク (Sir Carmichael Clarke) の邸宅コムサイド (Combeside) が建てられた海岸線は、かつてはゴルフ場と農家が

あるだけの田園地帯だったが、現在は宅地開発が進み、小さな家やバンガローが建ち始めている。

約10年前までそこ〔チャーストン (Churston)〕は単なるゴルフ場で、ゴルフ場から海岸までの傾斜した土地には、1軒か2軒の農家に人が住んでいるだけで、緑の田園地帯が広がっていた。しかし最近チャーストンとペイントン (Paington) の間に大規模な宅地開発があり、現在その海岸線には小さな家やバンガロー、そして新しくできた道路などが点在している。サー・カーマイケル・クラークは何物にも遮られずに海を見渡すことのできる2エーカーほどの土地を購入した。彼の建てた家は近代的なデザインで——目にとって決して不愉快というわけではない白い長方形をしていた。彼のコレクションを収めた2つの大きな陳列室を別にすれば、それは大きな家ではなかった³¹⁾。(92～93頁)

サー・カーマイケルの弟、フランクリン・クラーク (Franklin Clarke) によれば、夏は海岸を訪れる観光客でにぎわうものの、コームサイドの周囲には町どころか、集落と呼べる村さえない——「厳密に言って、このあたりに村はありません。チャーストン・フェラーズ (Churston Ferrers) には郵便局といくつかのコテッジがあります——でも、村や商店はありません」(95～96頁)——というが、おそらく、やがて、すでに始まっている宅地開発により、今後次々と建築されていく新興住宅に住む人びとを顧客とした商店や、観光客用の宿泊施設が立ち並ぶようになり、コームサイドの周辺もベクスヒル・オン・シーのように、村、そして場合によっては町へと発展していくことが予想される。

4. 2. 『もの言えぬ証人』 (*Dumb Witness*) : ポワロ作品、1937年出版、1936年設定³²⁾

ヘザー・クレメンソン (Heather Clemenson) によると、「20世紀になると、道路の敷設が地所内のアメニティ・ランド〔ガーデンやパークなどのエリア³³⁾〕の主な脅威として表面化してきた。町のバイパス道の敷設や、1955年以降になると国の高速道路網の発展が、すでに多くのランドスケープ・パーク〔景観公園〕に重要な影響を与えていた」(187頁)。クリスティが『もの言えぬ証人』で描いた、ジョージ王朝風建築のリトルグリーン・ハウス (Littlegreen House) のあるマーケット・ベイジング町 (Market Basing) は、新しいバイパス道が町から離れたところに建設されたため、(今のところは) 近代化を免れた場所になっている。

そこ〔マーケット・ベイジング町〕はもともとは幹線道路沿いにあったのだが、近代的なバイパス道が作られたために、交通の中心から3マイルほど北に位置することになり、その結果、時代遅れの威厳と静寂さを醸し出し続けることになった。この町の幅の広い大通りと、市の立つ大きな広場は、「ここはかつて重要な場所でしたし、分別があり、育ちのいい人にとってはいまだに重要な場所です。自動車が猛スピードで行き交う近代的な世の中には、新式の道路を全速力で進ませましょう。ここは連帯感と美が手に手を取っていた時代に、日々を生き抜くために建てられたのです」とでも言っているかのようだった。(48頁)

さらに描写は続く。

今回だけは、ある意味、取り敢えず声を掛けてみたときに、「すみません、私もこのあたりは不慣れなので」という、よくある回答が返ってこなかった。本当に、マーケット・ベイジング町にはよそから来た人など存在しないかのようなようだった！ そんな印象があった！ すでに私はボワロと自分が（特にボワロが）何だか人目に付いているような気がした。私たちは、伝統に守られたイングランドのマーケット・タウンの持つ和らいだ背景から浮いた存在になりがちだった。(49頁)

こうした描写は、マーケット・ベイジング町とは異なり、当時、多くの田園の町には、交通網の発達により、訪問客を含め、多くの「部外者」がやって来て、段々とその町の「伝統」が薄れていっていることをうかがわせる。

また、使用人が見つからないだけでなく、よいレディーズ・コンパニオンも見つけにくくなっている。第一次世界大戦により、女性の社会進出が活発になったことで、以前は出自がよく、教養もある（才能もある）が経済的に困窮している女性が就いていたレディーズ・コンパニオンは、他にできる仕事がないので、あまり能力のない女性まで就いていることが問題として指摘されている³⁴⁾。

4. 3. 『ホロー荘の殺人』 (*The Hollow*) : ボワロ作品、1946年出版、1936年設定³⁵⁾

その正式名称「歴史的名勝地および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト (The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty)」が示すように、1895年の創立時から常に自然の景勝地や歴史的な名勝地の保存を目的に精力的に活動を続けるナショナル・トラストが介入し、建築業者による新たな開発を禁じる前に、投機的な開発業者たちが田園地方に小さなコテージを建設している様子が描かれる。ミステリーの謎解きには直接関係がないのに、そうしたコテージの1つをボワロが週末用として購入したことをわざわざ記しているのは³⁶⁾、クリスティがナショナル・トラストの活動に賛同していたか否かは別として、環境保護運動に何らかの関心を持っていたか、あるいは時事問題に敏感であったことを想像させる。なお、そうしたクリスティの態度が1960年代、1970年代の作品により明確になっていく様子は、今後の論文で分析する予定である。ちなみに『ホロー荘の殺人』でも、使用人が減少している様子が指摘されている。

4. 4. 『スリーピング・マードー』 (*Sleeping Murder*) : ミス・マーブル作品、出版は1976年だが、執筆は第二次世界大戦中の1940年³⁷⁾、1938年設定³⁸⁾

やはり1930年代後半が舞台となっている『ゼロ時間』 (*Towards Zero*, 1944年)³⁹⁾にも海岸沿いのリゾート地でのホテルの建設や改造、住宅の新築や大邸宅の改良の描写があるが、『スリーピング・マードー』では宅地開発が進んだ海岸沿いのリゾート地、ディルマス町 (Dillmouth) の人びとの「往来」への言及が散見する。年配の庭師が物語の舞台となる邸宅ヒルサイド (Hillside) の歴代の所有者について語る際、ディルマス町が海岸沿いのリゾート地であることも影響しているかもしれないが、「最近では皆、家を買っても10年から12年ほどすると引っ越して行ってしまう[た

め)、落ち着きがない」(15頁)現状を嘆く。当地では、そうした人びとのニーズに合わせるかのように、古くから当地で営業している不動産屋と、最近建てられた新興住宅地を扱う不動産屋の双方が存在している。また、海岸沿いのリゾート地を訪問する旅行者の気質にも変化が見られる——「そうですね、もちろん当時ここは小さな場所でした。ただし、昔から、いつも多くの夏の訪問客が来ていたことを覚えています。でも、彼らは毎年ここを訪れる、騒ぎを起こさない感じのいい人びとで、最近ここを訪れているような観光客や大型バス旅行者ではありませんでした。彼らは皆、気持ちのいい家族連れの人たちで、毎年毎年、同じ部屋を借りに戻って来たものでした」(122頁)。さらに、使用人の雇用の難しさに関しては、子どものいる家庭の料理人になることを嫌う使用人たちが出ていることが語られている。

4.5. 『ナイルに死す』(*Death on the Nile*) : ポワロ作品、1937年出版、1938年から1939年にかけての設定⁴⁰⁾

爵位を持つ紳士、サー・ジョージ・ウッド(Sir George Wode)は、馬で破産し、ウッド家が代々所有していた「カントリーハウス」(408頁)、ウッド・ホール(Wode Hall)を手放さざるを得なくなり、アメリカ人の若き資産家、リネット・リッジウェイ(Linnet Ridgeway)がそれを購入する。彼女はウッド・ホールを増改築したり、地所内にある、古くなったコテージを取り壊し、住民を別の場所に移す計画を立てたりして、地元の人びとを怒らせる改良を押し進める。

「あの計画のことでピアス氏(Mr. Pierce)に会いに行かないと」

「計画ですって?」

「そう。すごく不愉快で不衛生な古いコテージが何軒か建っているんだけど、それらを取り壊して、皆には引っ越してもらっているところなの」

「まあ、あなたって、何て衛生に気を配っていて、公共心に富んでいるのかしら!」

「いずれにしたって、彼らには出て行ってもらわなければならなかったわ。あんなところにコテージがあったら、私の新しいスイミング・プールが丸見えになってしまっていたもの」

「コテージに住んでいた人たちは引っ越すことを望んでいるの?」

「多くの人は喜んでいるわ。1人か2人、ちょっとばかな態度を取っているけれど——実のところ、本当にイライラさせられるのよね。あの人たちは自分たちの生活状況がどれだけ大いに向上するのかを理解できていないみたいなの!」

「でもきっとあなたって、そのことに対してかなり高圧的な態度を取っているんでしょね」

「ねえ、ジョアンナ(Joanna Southwood)、それは彼らにとって本当に利益のあることなのよ」

「ええ、きっとそうなんでしょうね。無理やり施す慈善ってところね」

リネットは顔をしかめた。ジョアンナは笑い声をあげた。

「さあ、さあ、あなたは本当に暴君だってこと、認めなさいよ。慈善心に富む暴君と言われる方がいいなら、そう言ってもいいわよ」(22~23頁、強調は原典によるもの)

破産して地所を手放さざるを得なくなったサー・ジョージでさえ、彼女の改良の方法に憤りを感じているというのは何とも皮肉な話ではあるが、彼女はカントリーハウスという地所の運営に伴う責任を理解しておらず、すべてはお金で解決できると考えており、他者の視点に立ってものを考えることができない。それゆえに友人ジャクリーン・ド・ベルフォール (Jacqueline de Bellfort) から彼女の婚約者であるサイモン・ドイル (Simon Doyle) を奪い取ることを厭わないだけでなく、結局、友人から奪い取ったつむりのサイモンに利用され、殺されることになる。だからと言って、リネットが排除されることで、アメリカ人の手に渡ったカントリーハウスがイギリス人の地主階級に戻るのかというと、そうはならない。リネットと結婚したサイモンは田園の、貧しいが旧家の次男であるのだが、彼は妻の殺人には成功するものの、彼の財産乗っ取り計画はとん挫する。イギリスの象徴ともいえるカントリーハウスはもう、イギリス人の上流階級の手元には戻らないのである。

また、「イングランドで最もお金持ちで、夫にしたい男性として引く手あまたの貴族の1人」(84頁)とされているウィンドルシャム卿 (Lord Charles Windlesham) でさえ、当初リネットとの結婚を望んでいたのは、エリザベス朝時代からの長い歴史を誇るウィンドルシャム家の地所、チャルトンベリー (Charltonbury) を維持するには「お金のために結婚する必要性」(12頁)があることを承知しており、リネットの財産により、それが果たせると考えていたからであった。彼はリネットとの結婚を夢想し、「西棟の改修をし、スコットランドの猟場を貸し出さずに済む」(12頁)、将来の魅力的な計画に胸躍らせる。彼は彼女と破談になったあと、カナダに行ってしまったことが記されている。テニスウッドによると、

… イギリスの貴族がアメリカの富と結婚しようと見苦しい争奪戦を繰り広げるとい話はエドワード朝の地主階級についての伝説の1つであったが、英米間のロマンスは、売り飛ばされた花嫁というのがありきたりのものとなったあとも長く続いた。〔中略〕1947年版の『デブレット貴族年鑑』を見ると、当時存命中だった901名の貴族上院議員のうち45名——つまり約20人に1人——がアメリカ人と結婚しているか、結婚していたことがあったことが分かる。^{*}

(脚注：^{*}アメリカがイギリスの貴族にとって、花嫁の出身地として断然、最も人気の高い国であった一方で、大英帝国全体——カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ケニア、ローデシア、インド、香港が記載されている——が花嫁を産出していた。)(『野望』144～145頁)

というので、ウィンドルシャム卿がカナダに渡ったのも、滞在先でのカナダの資産家の娘との出会いを求めてのことだったのかもしれない。クリスティはたった数行で片付けられてしまう脇役の言動に、イギリスの上流階級の地所と邸宅は、もうイギリスが生み出す富(だけ)では支えるのが難しい様子を実に巧みに示唆しているように思われる⁴¹⁾。

4.6. 『殺人は容易だ』(*Murder Is Easy*): 1938年出版、1930年代後半の設定か

この作品に登場する大邸宅アッシュ・マナー (Ashe Manor) は、元の持ち主である旧家のコ

ンウェイ (Conway) 家の手を離れ、当地ウィッチウッド・アンダー・アッシュ町 (Wychwood-under-Ashe)⁴²⁾ の出身で、靴屋の息子から新聞王にのし上がり、爵位を授与されたホイットフィールド卿 (Lord Gordon Whitfield) によって買い取られ⁴³⁾、「自分の財力をひけらかしたかった」(31頁) 彼によって「調和を欠いた城塞」(25頁) のように飾り立てられている。セクション「2. 2. 2.」で取り上げた、1920年代後半を舞台にした『七つの時計』のサー・オズワルドも、本作品の時代設定となる1930年代後半には自分のカントリーハウスを手に入れ、自分の成功をひけらかそうと、そこにホイットフィールド卿に勝るとも劣らない大改造を行っているのではないかと想像させる。また、当地の旧家のウェインフリート (Waynflete) 家も財政的に立ち行かなくなり、彼らの「マナーハウス」(36頁)、ウィッチ・ホール (Wych Hall) を売りに出す。宅地開発に用いようと、建築業者がそこを手に入れようとしていたところにホイットフィールド卿が助けに入り、ウィッチ・ホールはジョージ王朝風の姿をとどめたまま、今は図書館兼博物館として利用されている。

この作品は、久し振りにイギリスに帰国したルーク・フィッツウィリアム (Luke Fitzwilliam) が海岸線からロンドンに向かう列車の窓から見る田園地帯の宅地開発に目を見張る場面から始まる——「家々もいたるところにキノコのように生えている。不快なちっぼけな家々！ ぞっとするようなちっぼけな家々！ 田園地帯中に広がるもったいぶった様子の鶏小屋！」(2頁)——のだが、それとは対照的に、ウィッチウッド村が「異例と言っているほど最近の宅地開発によって損なわれていない」(24頁) のも、村の中心から少し離れたところにあるアッシュ・マナーはその改造のせいで、ルークによって「悪夢」(25頁)、「怪物」(40頁)、「醜態」(40頁) と描写されるようなものになってしまっている一方で、故郷を大切に思うホイットフィールド卿の努力によるものなのかもしれない。ただし、ウィッチウッド村は田園ののどかさを保つ代償として、「時流に乗り遅れた」(94頁)、いまだに迷信の残る僻地となっており、住民は年配者ばかりで、「男性1人に対して女性6人」(33頁) である。ジェントリー階級ではなく、成り上がりにすぎないホイットフィールド卿の采配や、その結果当地が近代化から取り残されている現状を快く思っていない住民もいる。クリスティが近代化、都会化といった時代の流れをそのプラス面とマイナス面の両面から描いていることがうかがえる。

4. 7. 『杉の枢』(Sad Cypress) : ポワロ作品、1940年出版、1939年設定⁴⁴⁾

以前からクリスティ作品に散見する、よい使用人を見つける難しさを嘆くセリフは、1938年出版の『殺人は容易だ』にも、1940年出版の本作品にも登場するが、本作品はカントリーハウスのような大邸宅(とその地所)を売却することの難しさについても触れている。セクション「2. 2. 2.」で、広大な地所に買い手は現れにくく、1920年代、1930年代と、カントリーハウスの中には様々な施設に改造されるものが多かったというキャナダインの解説を引用したが、1939年設定の本作品では、カントリーハウスはホテルに改造されたり、建て直されたりすることが多くなっていた現状が登場人物の会話によって伝えられる。事件の起こった地所ハンターベリー (Hunterbury) は無事に売却されるものの、そこを購入するのは、上流階級のサー・ジョージ・カー (Sir George Kerr) の死去に伴って、新しく当地の議員となった(おそらく戦争で活躍した) 軍人のサマヴェル少佐 (Major Somervell) である。クリスティ作品では『スタイルズ

『莊の怪事件』から一貫して、カントリーハウスの持ち主の変遷に時代の変遷を読み取ることができるようになっている。

結び

以上、本論文では第一次世界大戦中となる1910年代後半から第二次世界大戦勃発直前の1930年代後半までを舞台にしたクリスティ作品を扱った。次回の論文では第二次世界大戦中の1940年代前半から1950年代後半までを舞台にしたクリスティ作品を扱い、引き続き、彼女の作品に描かれた田園風景の変化の様子を年代順にまとめていく予定である。

注

- 1) ただし、『アガサ・クリスティの秘密ノート』(Agatha Christie's Complete Secret Notebooks)を編集し、ハーパーコリンズ版の『スタイルズ荘の怪事件』に序文を寄せたジョン・カラン(John Curran)は、この物語は1917年の設定であると主張している(『秘密ノート』3頁;「序文」x頁)。
- 2) ヘイスティングズの軍での職位が大尉(Captain)で、名前がアーサー(Arthur)であることが明らかになるのは1922年12月から1923年3月まで雑誌連載された次のポワロ(Hercule Poirot)作品、『ゴルフ場殺人事件』(The Murder on the Links, 1923年)である。また、戯曲『ブラック・コーヒー』(Black Coffee, 1930年)の「配役」欄と、『ABC殺人事件』(The ABC Murders, 1936年)の「前書き」では、ヘイスティングズは大英帝国勲章(OBE)を授けられていることが明らかになる。
なお、『ゴルフ場殺人事件』で、ヘイスティングズが「傷病兵として送還された」(5頁)のはソムの戦いのあとであることが明らかになる。これは『カーテン』で『スタイルズ荘の怪事件』が1916年の出来事であったとヘイスティングズに語るクリスティの設定と矛盾する。なぜなら、ソムの戦いは1916年の7月から11月のことであるのに、ヘイスティングズがスタイルズ・コートに到着したのは7月5日だったと明記されているからである。彼がスタイルズ・コートに到着したのは7月5日であることと、作品の冒頭にある「私は前線から傷病兵として本国に送還され、どちらかと言うと気が滅入るような回復期患者用の施設で数か月過ごしたあと、1か月の病気休暇を与えられた」(1頁)という描写を照らし合わせると、注1で紹介したカランの指摘の通り、『スタイルズ荘の怪事件』は1916年の設定ではなく、1917年の設定と考える方が適当となる。
- 3) それを象徴するかのようには、『カーテン』でヘイスティングズは『スタイルズ荘の怪事件』でスタイルズ・コートを訪問した際のことを「楽しかった日々」(14頁)と懐かしく振り返るが、難民として異国の地に避難していたポワロは当時は振り返り、「悲しくてつらい時期」(14頁)で、「楽しくなどなかった」(14頁)と述べている。ただし、その後、ゲストハウスになったスタイルズ・コートの宿泊客たちを観察したヘイスティングズは、『スタイルズ荘の怪事件』の日々が幸せに満ちていたと考えていたことは自分の思い込みでしかなかったと訂正することになる。
- 4) G・E・ミンゲイ(G.E. Mingay)によると、それまで1ポンドにつき1シリング4ペンスを超えることがなかった所得税は、1914年以降は4シリングを下回ることがなかったという(206頁)。そしてデイヴィッド・キャナダイン(David Cannadine)によると、第一次世界大戦の間に1万ポンドを超える所得に対して初めて追加税(すでに課税された所得に追加で課される税)が導入されたという(97頁)。また、当時のカントリーハウス運営について論じているエイドリアン・ティニスウッド(Adrian Tinniswood)の研究書は、所得税と土地税と地方税に地所の賃貸から得る収入の30パーセント分がかかったことを紹介している(『カントリーハウス訪問』174頁)。
- 5) 特に貴族の被害が大きかったことについて、キャナダインは、

…イギリスの貴族は第一次世界大戦の影響で回復できないほど弱体化した。バラ戦争以来、あれほど多くの貴族が、あれほど突然に、あれほど暴力的な方法で命を落としたことはなかった。そして彼らの死者の数は相対的に言って、他の社会階級の死者の数よりはるかに多かった。実際は兵役に就いた大多数が帰国したのかもしれないが、中産階級や労働者階級よりもかなり少

なかった。戦争に服役したイギリスとアイルランドの貴族とその息子たちは5人に1人が亡くなった。しかし戦争で兵役に就いたすべての人員で見ると、亡くなったのは8人に1人であった。…失われた命の相対的な数で言うと、爵位のある、領地を所有している階級が最大の犠牲を払ったということに疑問をさしはさむ余地はない。(83頁、強調は原典によるもの)

とまとめている。ヘザー・クレメンソン (Heather Clemenson) は、パブリック・スクール・クラブによると、その多くが地所を持つ上流階級であったメンバーのうち、1918年までに800名が戦闘中に亡くなったことを紹介し (111頁)、J・V・ベケット (J.V. Beckett) は、20名の貴族が、49名の法定相続人が、次男以下に至っては相当の数が兵役中に亡くなったことを紹介し (473頁)、ミンゲイは、戦争に服役した50歳未満の貴族とその息子たちは、ほぼ5人に1人が命を落としたことを紹介している (204頁)。

- 6) 税率は地所の価値により (そして研究書によっても多少) 異なるが、例えばキャナダインによると、死亡税 (相続税) は1894年に導入された当初は100万ポンドを超える価値のある地所に8パーセントを課していたが、1909年から1914年の間は15パーセントに、1919年から1930年の間は40パーセントに、1930年から1934年の間は50パーセントに、1939年までに60パーセントに上昇した (96~97頁)。
- 7) F・M・L・トンプソン (F.M.L. Thompson) によると「1918年から1921年の間に」(332頁)、クレメンソンによると「1918年から1922年の間に」(111頁)、キャナダインによると「第一次世界大戦の直前と直後の間に」(111頁)、ピーター・マンドラー (Peter Mandler) によると「1919年から1921年の間に」(228頁)、トンプソンとキャナダインによると「イングランドの土地の4分の1」(トンプソン 332頁; キャナダイン 111頁) に、クレメンソンによると「イングランドとウェールズの土地の4分の1」(111頁) にあたる「600から800万エーカーの土地」(キャナダイン 111頁) が売られ、その所有者を——「世代間でなく、階級間で」(マンドラー 228頁) ——変えたという。また、この間の土地所有者の移行は、その突然さにおいても規模においてもインパクトが強く (マンドラー 228頁)、新聞には「イングランドの持ち主が変わりつつある (England is changing hands)」というフレーズがあふれるようになったという (トンプソン 330頁; ミンゲイ 207頁; マンドラー 228頁)。
- 8) マンドラーは、全領主のうちの5分の1が自分たちの地所を売り払うことで階級を滑り落ちていき (228頁)、元の領主たちが去った場所に流入して来た新しい所有者は、農地を購入した農業経営者を抜かすと、混み合った都会から引越すことを望んでいた中産階級の都会人たちであったと述べている (229頁)。
- 9) ある年の6月に起こった出来事を扱っている『ゴルフ場殺人事件』には1923年4月に雑誌に掲載された短編「プリマス行き急行列車」(“The Plymouth Express”) への言及があるので、出版年である1923年の6月を舞台設定と仮定すると、『スタイルズ荘の怪事件』から『アクロイド殺し』までのポワロ作品は以下のような時代設定となる。『ビッグ4』(The Big Four、1927年出版、1924年の短編を集めて改稿したもの) は『ゴルフ場殺人事件』の事件解決後に、ヘイスティングズがアルゼンチンに去ってから1年半後の7月の設定とされているので、『ビッグ4』の冒頭は1925年の7月であり、ヘイスティングズが結婚してアルゼンチンに去ったのは1924年の1月だったことになる。そして、『ビッグ4』での事件の解決は物語の冒頭の翌年の6月となっているので、『ビッグ4』は1925年7月から1926年6月ごろまでの出来事を扱っていることになる。さらに、ポワロは『ビッグ4』の事件が解決し、ヘイスティングズがアルゼンチンに戻ったあと、探偵業を引退したことになるので、ポワロの引退は1926年6月以降となる。そして、『アクロイド殺し』には、ポワロは「1年前に引退した」(74頁) とあるので、この作品の舞台は、出版年の翌年の1927年9月の出来事ということになる。他方、作品の時代設定が本としての出版年よりも未来になることはないと仮定すると、アメリカでは1923年3月、イギリスでは1923年5月に出版された『ゴルフ場殺人事件』の設定は1923年6月ではなく、1922年6月であると考えられ、この注で扱ったすべての作品の時代設定は1年ずつ前倒しとなり、『アクロイド殺し』の設定は1926年9月となる。
- 10) 『七つの時計』は『チムニーズ館の秘密』の4年後の設定となっており、ケイタラム侯爵家は第4章で自宅を2年間貸し出す契約が切れてチムニーズに戻って来ることから、そのような計算になる。
- 11) キャナダインは「貴族階級」を示す際、“aristocracy”を用いたり、“patricians” (元来は古代ローマの支配階級「パトリキ」を指す) を用いたり、“grandees” (元来はスペインやポルトガルの最高貴族を指す「大公」を意味する「高位の人」) を用いたりしているが、本論文ではどれも「貴族」という日本語訳をあてることにする。

- 12) 1924年に短編として発表され、1927年に改訂して1巻本として出版された、1925年から1926年が舞台設定と思われる『ビッグ4』でも、イギリスの貴族のカントリーハウスはその上級使用人を含めて、アメリカの石炭王である億万長者に（厳密には犯罪組織に）6か月間貸し出されている。
- 13) クレメンソンはラルフ・パンフリー（Ralph Pumphrey）の論文の「表3」と「表4」を参照しながら、1885年から1911年の間に貴族の称号を与えられた者の3分の1以上は大きな地所を所有している階級以外の階級の出身で、4分の1以上は商業界と産業界の出身であったとし、19世紀末までに大きな地所の所有はもはや貴族社会の一員になるための必要条件ではなくなっていたと述べている（97頁）。ただし、パンフリーの論文には、「1885年以降〔1911年までに〕新しく貴族となった者のうち、商業と産業に関わっていた人は平均すると全体の約3分の1（31.1%）」（11頁）であり、「1885年から1911年の25年を超える期間に新たに貴族の称号を与えられた200以上の家系のうち、土地を持っていなかった家系は50を下回っていた」（14頁）と記されている。
- 14) 1923年に雑誌に掲載された「クリスマス・プディングの冒険」（“The Adventure of Christmas Pudding”）では、レイシー家（The Laceys）はその地所キングズ・レイシー（Kings Lacey）の維持のため、宅地開発用の土地として地所の一部を売却している。
- 15) クレメンソンが第9章「カントリーハウスの生き残り」と適応」のセクション「所有者の変遷の年表」で、1880年から1980年代まで、カントリーハウスの所有者が個人から団体へどのように変わっていったかを分かりやすくまとめている。
- 16) マンドラーはさらに、「高くついて無駄なもの（white elephants）」（第3部のタイトル）と化したカントリーハウスが2つの世界大戦の間にホステル、パブリックスクール、職業訓練所、ホテル、フラット、動物園などに改造された具体例を、第6章「地主のいない土地」のセクション「放棄、取り壊し、廃止」で挙げている。
- 17) キャナダインは、実際にイギリスでどの程度のカントリーハウスが取り壊されたのかについての正確な数字は分からないとしながらも、1870年から1919年の間にイングランド、ウェールズ、スコットランドで取り壊された大邸宅は79軒であったのに対して、1920年から1939年の間には221軒の大邸宅が取り壊されたと述べている（119頁）。また、ティニスウッドは、1870年代と1880年代の農業不況や、1894年に導入された死亡税（相続税）が原因となり、以前からカントリーハウスの中には取り壊されるものが存在していたが、第一次世界大戦後、取り壊しの速度が増していったことを指摘したうえで（『野望』30頁）、『カントリーハウス訪問の歴史』では1918年から1945年の間にイギリスでは458軒のカントリーハウスが取り壊された（174頁）と、『高貴な野望』では1920年代には180軒以上が、1930年代には220軒程度のカントリーハウスが取り壊され（30頁）、2つの世界大戦の間にはイングランドだけでも420軒のカントリーハウスが取り壊されたと述べている（2頁）。
- 18) 「ミス・マーブルの履歴書（1）」のセクション「1. 2. 1.」で示したように、『牧師館の殺人』の年代設定については2通りの考え方が可能である。一方で、『牧師館の殺人』の出来事は短編集『13の謎』（*The Thirteen Problems*, 1932年）でのパントリー大佐夫妻（Colonel Arthur Bantry and Dolly Bantry）の晩餐会のあとに起こったことになっているため、晩餐会開催と同年となる1929年か、『牧師館の殺人』の出版年である1930年と考えられる。他方で、兵役を終えて帰国した兵士たちの精神衛生への第一次世界大戦の影響の大きさ、特にシェルショックについての描写がある点から考えると、第一次世界大戦直後となる1920年代前半の設定とも考えられる。本論文では、作品の年代設定はクリスティの他作品との整合性がある方を有効と見なし、『牧師館の殺人』は1929年から1930年の設定であるとして論を進める。これは、このあとのセクション「3. 3.」で取り上げる『書齋の死体』（*The Body in the Library*, 1942年）でも同様である。
- 19) この点について、E・S・ターナー（E.S. Turner）が使用人の変遷という視点から第16章「皆の関心の話」と第20章「『彼らへの失業手当を止める!』」で、スー・ブルーリー（Sue Bruley）が女性の雇用という視点から第1章「見捨てられた女性たちの悲痛な叫び、1900年から1914年」と第3章「新しい女性性、1919年から1939年」のそれぞれのセクション「有給の仕事と労働組合」で、ティニスウッドがカントリーハウスの変遷という視点から『長い週末』の第15章「奉公する場所」で、デボラ・サッグ・ライアン（Deborah Sugg Ryan）が新興住宅建設との関連から第4章「効率性」でまとめているので参照されたい。
- 20) プロズロー夫人（Anne Protheroe）はセント・メアリ・ミード村で買い物をする際、「車でその〔セント・メアリ・ミード〕村にやって来る」という描写が繰り返されていることから、オールド・ホールはセント・メアリ・ミード村の中にあるのではないことが分かる。

- 21) スラック警部 (Inspector Slack) の描写によると、オールド・ホールからセント・メアリ・ミード村に広がる森林地は少なくとも4分の3マイル (約1.2キロ) の距離がある。
- 22) 「ミス・マーブルの履歴書 (1)」のセクション「1. 2. 2.」で論じたように、事件は『牧師館の殺人』よりもあとで、『書斎の死体』よりも前に起こっていることが分かるため、この作品は1929年から出版年の1931年までの間のどこかの時点の設定と考えられる。
- 23) 『書斎の死体』にはいくつもの年代設定が可能である。その中で最も有力な2つの候補については「ミス・マーブルの履歴書 (1)」のセクション「1. 3. 1.」で詳しく論じた通りである。まず、登場人物たちの成長の具合を考慮した場合、『牧師館の殺人』の最終章で妊娠していることが記されていたグリゼルダの息子が「はいはい」をしているので、『牧師館の殺人』の1年から1年半ほどあとの1930年ごろから1932年ごろの間のある年の9月の設定と考えられるのだが、他方で、作品で言及される史実を考慮すると、ヴィヴィアン・リー (Vivien Leigh) が映画『風と共に去りぬ』 (*Gone with the Wind*, 1939年) の主役に抜擢された話が出てくるため、1939年1月以降の設定となり、1939年9月の設定とも考えられる。ただし、ヴィクター・T・C・ミドルトン (Victor T.C. Middleton) の次の説明に従えば、

もちろん、戦時中〔第二次世界大戦中〕は海外へのレジャー旅行などなかったし、戦争が終わったあとでもイギリス人が海外旅行で通貨を使用することは許可されなかった。戦時中は国内旅行も思いとどまるように積極的に説得され、南部と東部の大部分の海岸線は立ち入り禁止となり、場所によっては地雷が敷設されたり、侵略を防ぐための有刺鉄線で侵入を制限されたりした海岸もあった。多くのホテルや休暇用のキャンプ場はすでに戦争用に接収され、私的な車両使用のための燃料はなく、新車の販売はほとんどなかった。鉄道の駅には「あなたの旅行は本当に必要ですか?」と問いかけるポスターが貼られ、不要な旅行は広く止め立てされていた。(18頁)

この作品では海岸沿いのリゾート地が閉じられていないので、第二次世界大戦が始まっている1939年9月の設定と見なすのは難しく、登場人物たちの成長の具合を考慮し、1930年ごろから1932年ごろの間のある年の9月の設定と見なす説の方が適当であると思われる。

これら2つの候補以外にもいくつか候補が存在する。まず、出版年と同じ1942年説がある。198頁でバジル・ブレイク (Basil Blake) が空襲監視 (ARP (Air Raid Precautions)) 活動中に大けがをしたことが明らかになる。ミス・マーブルはブレイクについてバントリー大佐に向かって次のように説明する。

「バジルのことはよく聞き知っています。彼は空襲監視員の任務に就いていましたが、そのときたった18歳だったんですよ。彼は燃え盛る人家に入って行き、4人の子どもを1人ずつ救い出しました。彼は皆が危険だと言うのを振り切って、犬を救うために戻って行きました。すると建物が彼の上に崩れ落ちました。人びとは彼を救い出しました。でも彼は胸をひどく圧迫され、1年近くギブスをしたまま寝ていなければならず、その後も長い間体調を崩していました。彼はそのときデザインに興味を持ったんです」(198頁)

ジェレミー・ブラック (Jeremy Black) は、このミス・マーブルのセリフから、ブレイクは1940年9月から1941年5月のロンドン大空襲 (ブリッツ) で負傷したと推測している (113頁)。同様の指摘はクリスティのノートを編集したカランも行っている (『秘密ノート』366頁)。ブラックの指摘を有効と見なし、ロンドン大空襲が始まってすぐの1940年9月にブレイクが負傷したと仮定すると、彼はそこから約1年後の1941年の夏まで伏せており、「その後も長い間体調を崩していた」ことになる。「長い間 (for a long time)」がどの程度の期間なのかは推測の域を出ないが、1年近かったのならば「もう1年」と述べたであろうから、仮に半年程度と見積もると、1942年の春ごろまで体調が優れなかったと思われる。すると、この作品はアメリカで1941年の5月から6月にかけて連載されたあと、アメリカでは1942年2月に、イギリスでは同年5月に出版されているため、リアルタイムのイギリスを描いていることになる。

ただし、そう仮定すると、2つの大きな矛盾が生じる。1つは、この物語の殺人事件が9月21日に起こっているため、出版時より未来を描いていることになる点である。もう1つは、ブレイクの

年齢である。上記の引用にあるように、ブレイクが1940年9月に18歳で、物語の現在となる1942年9月に20歳だとすると、たった2年前のことを、それも成人の21歳になっているならまだしも、やはり未成年の20歳の青年について、「たった18歳だった」という言い方をするのは、彼の若さを強調しようとしているのだとしても、少々大げさに思われる。ちょうど2年前に大けがをして1年間伏せていて、その後も長期間にわたって体調が優れなかったのならば、まだ回復直後のはずで、その彼が物語の現在、毎晩暴飲暴食をしているとは、戦時中で、よほど自棄になっているということなのだろうか。クリスティはどうやら設定は1930年代前半なのに、リアルタイムの歴史的、文化的背景をあちこちにちりばめているのかもしれない。

さらに、出版年よりも未来の年代設定を主張する研究者もいる。ピーター・キーティング (Peter Keating) は、この作品は第二次世界大戦中の1942年に出版されているにもかかわらず、上記のミス・マーブルの話の聞いたあと、ブレイクを嫌っていたバントリー大佐が自分の偏見を反省するセリフ——「ずっと、あいつは戦争〔第二次世界大戦〕に参加せずに逃げおせせたのだと思っていたんです。結論を出すときには注意しなければならないということですね」(198～199頁)——から、クリスティはこの作品が、第二次世界大戦が終戦を迎えた直後という未来に設定されていると思わせようとしていると主張している (142～143頁)。

- 24) クリスティ作品では、ヴィクトリア朝時代に建てられたカントリーハウスは産業革命による成金が富を見せびらかすために、上流階級の真似をして建てた醜い建造物として描写されることが多いが、ゴシントン・ホールも例外ではなく、『鏡は横にひび割れて』でバントリー夫人によって何度も否定的に「ヴィクトリアン」と形容されている。おそらく、ゴシントン・ホールもヴィクトリア朝時代に建てられたもので、最初の当主 (の家族) がその後保持できなくなり、売り出されたのであろう。
- 25) ただし、『鏡は横にひび割れて』でバントリー夫人は、「たった4人の使用人で切り盛りしていた」(27頁)と言っている。それは第二次世界大戦後、あるいはバントリー大佐の死後に、財政を切り詰めなければならなくなったあとのことなのかもしれない。
- 26) なぜ2つの世界大戦の間にチューダー朝様式が流行したのかについての詳細は、サッグ・ライアンの第5章「ノスタルジア」を参照されたい。
- 27) 「ミス・マーブルの履歴書 (1)」のセクション「1.3.4.」で論じたように、本編では『書斎の死体』で「はいはい」をしていたクレメント牧師夫妻の息子が飴をなめているので、『書斎の死体』から数年後の事件を描いていると考えられるため、『書斎の死体』を1930年から1932年の間のある年の9月の設定と見なせば、1930年代前半の設定となる一方で、『書斎の死体』を1939年9月の設定と見なせば、雑誌連載と同時期の1940年代初頭の設定となる。
- 28) 「ミス・マーブルの履歴書 (1)」のセクション「1.3.3.」で論じたように、ミス・マーブルの姪孫が3歳になっていることから、『牧師館の殺人』での事件が起こるよりも前にミス・マーブル宅で開かれていた集まり「火曜クラブ」では未婚であったレイモンドがそのあとすぐに結婚し、子どもが生まれたと仮定すると、1935年前後の設定と考えられる一方で、「昔ながらの殺人事件」は1942年の2月、「申し分のないメイド」は1942年の4月と、ほぼ同時期に雑誌に掲載されているので、注27に記したように、「申し分のないメイド」の設定を雑誌連載と同時期の1940年代初頭と見なすのなら、「昔ながらの殺人事件」も雑誌連載と同時期の1940年代初頭の設定と見なすことも可能である。
- 29) 最初の犠牲者であるバビントン牧師 (Stephen Babbington) は亡くなったとき、1916年から17年間ルーマス (Loomouth) で牧師を務めていたことになっているので、1933年の夏の設定となる。
- 30) 冒頭に1935年6月と明記されており、それから6か月の間イギリスに滞在したヘイスティングズが同年11月までの様子を語る設定となっている。
- 31) ただし、コームサイドでは執事、家政婦、数人のメイド、庭師、サー・カーマイケルの美術品を管理する常駐の秘書、病身のレディ・クラーク (Lady Charlotte Clarke) のための常駐の看護婦などが働いていることを考えると、日本語の直訳となる「大きな家ではなかった」では実情を伝えられず、「大豪邸ではなかった」程度の意識がふさわしいと思われる。
- 32) 事件の犠牲者の墓石に1936年という年号が明記されている。4月から7月の出来事を扱い、殺人事件は5月1日に起こっている。その事件簿をヘイスティングズが約1年後に綴っていることが最終章で明らかになる。
- 33) アメニティ・ランドの定義についてはクレメンソンの第4章「エステート・アメニティ・ランド」を参照されたい。
- 34) 出版は1944年だが、やはり1930年代後半が舞台となる『ゼロ時間』(Towards Zero)でも登場人物

の1人が同様の指摘をしている。ちなみに、『ゼロ時間』はある年の11月中旬に始まり、翌年の9月に終わる設定だが、6月のノルウェーへのヨット旅行への言及や、9月の子ども連れの家族旅行への言及があるうえ、事件にかかわる登場人物たちが9月に海岸線に長期滞在する休暇旅行をしているため、注23で紹介したミドルトンの説明に従えば、この物語の設定は最も遅くても、第二次世界大戦が始まる前の1937年11月から1938年9月と考えるのが適当であろう。

- 35) 出版は第二次世界大戦後の1946年だが、登場人物たちがある年の9月に開かれる週末のパーティーにロンドンから車で向かう際、1936年11月に火事で全焼したクリスタル・パレスの側を通る計画を立てていることから、最も遅くても、1936年の設定であることが分かる。『もの言えぬ証人』が1936年4月から7月の設定なので、そのすぐあとの出来事と思われる。
- 36) カランは、ポワロが田園に家を買うなどということは考えられないうえ、その後、その家について2度と触れられないのは不自然であるとコメントしている（『秘密ノート』409～410頁）。
- 37) 物語の序盤に、ウエスト夫妻がミス・マーブルをジョン・ギールグッド（John Gielgud）が主演を務める『白い悪魔——モルフィ公爵夫人』（*The Duchess of Malfi*, 1612～1613年）のロンドン公演に招待している場面がある。キーティングは、ロンドンの劇場でギールグッドが『白い悪魔——モルフィ公爵夫人』の主演を務めたのは1945年の4月なので、クリスティは1940年に原稿を書き上げたあとも、書き足しや書き直しを続けたと推察している（143～146頁）。他方、クリスティのノートを編集したカランは、クリスティは1947年と1948年になってもなお『スリーピング・マダー』（ノートの段階でのタイトルは『女の顔を覆え』（*Cover her Face*））の構想を練っていたことを指摘し、『スリーピング・マダー』は第二次世界大戦中に執筆された原稿に後日加筆訂正が行われたというよりもむしろ、原稿の執筆そのものが第二次世界大戦後、しばらく経ってから、おそらく、1950年ごろに行われただろうと推察している（『秘密ノート』706～708頁）。おそらくこうした理由から、『スリーピング・マダー』には1943年に出版された『動く指』（*The Moving Finger*）への言及があるのだろう。
- 38) まず、作品内に描かれる史実から推察すると、「ミス・マーブルの履歴書（1）」のセクション「1. 4. 2.」で説明した通り、ジョージ6世（在位1936年～1952年）の写真と、エリザベス王女とマーガレット王女の写真が飾られている一方で、エリザベス王女の結婚式（1947年11月）の写真が飾られていないこと、船旅が止められておらず、海岸沿いのリゾート地が閉じられていないので、注23で紹介したミドルトンの説明に従えば、第二次世界大戦勃発前の設定と考えるべきであること、作品内で言及される世界大戦が第一次世界大戦であることなどから、この物語の舞台設定は1936年から1939年の間のどこかの時点である可能性が高い。そのうえで物語内で言及される年号を参考にとすると、庭師の話では、ハリディ夫人（Helen Halliday）が失踪した（あとですぐにケネディ医師（Dr. James Kennedy）が引越したために、彼の庭の手入れをした最後の年となった）のが1920年で、それが18年前になっていることから、舞台設定は1938年と考えられる。
- 39) 注34参照。
- 40) 『ナイルに死す』は『ひらいたトランプ』（*Cards on the Table*, 1936年）の1年後の設定で、ある年の秋からその翌年の2月までの出来事を語っている。『ひらいたトランプ』は、過去の犯罪について脅され（そうになっ）たために被害者を殺した犯人について論じているとき、登場人物の1人が「真実に行き着いたとしても、私たちの助けにはならないかもしれない。1912年に誰かが大おぼを階段から突き落としたりしても、それが1937年の私たちに大して役に立つことはないだろう」（66頁）と述べていることから、出版年の翌年となる1937年の設定だと考えられる。『ひらいたトランプ』で殺人事件が起こるのは10月18日なので、『ひらいたトランプ』の1年後を描く『ナイルに死す』は、出版年の翌年となる1938年の秋から1939年2月にかけての設定と考えられる。ただしカランによると、『ナイルに死す』は出版の2年前には完成していたとのことである（『秘密ノート』279頁）。
- 41) 『なぜ、エヴァンズに頼まなかったのか？』（*Why Didn't They Ask Evans?*, 1934年）でも、ある上流階級の一族の分家の当主が家柄を保つためにアメリカ人の資産家の娘と結婚したことへの言及がある。ちなみに、ある年の10月3日に起こった殺人事件から物語が始まる『なぜ、エヴァンズに頼まなかったのか？』は、1933年9月に閉じられた、地下鉄の大英博物館駅が登場することから、最も遅くても1932年の設定であると思われる。
- 42) 第3章によると、ウィッチウッド・アンダー・アッシュは「田舎の小さな町」（24頁）で、そこにウィッチウッド村があるとされている。
- 43) 注13で紹介したパンフリーによると、1885年から1911年の間に新たに貴族となった者たちが身を置

いていた業界は「伝統的な銀行と貿易のほか、鉄道、軍用・機械装備、出版・報道、冶金・化学製品、海運、織物、建築、鉱山、醸造など」(11～12頁)であるというので、ホイットフィールド卿の背景に一致している。

- 44) 第1部第7章に物語の現在が1939年であることが明記されており、殺人事件は7月27日に起こったことが繰り返し語られる。

引用文献

- Aldridge, Mark. *Agatha Christie's Poirot: The Greatest Detective in the World*. HarperCollins, 2020.
- Beckett, J.V. *The Aristocracy in England 1660-1914*. Basil Blackwell, 1986.
- Black, Jeremy. *The Importance of Being Poirot*. St. Augustine's Press, 2021.
- Bruley, Sue. *Women in Britain since 1900*. Palgrave, 1999.
- Cannadine, David. *The Decline and Fall of the British Aristocracy*. 1990. Vintage Books, 1999.
- Carr, J.L. *A Month in the Country*. Penguin Books, 1980.
- Christie, Agatha. *The ABC Murders*. 1936. Berkley Books, 1991.
- . "The Adventure of Christmas Pudding." 1923. *Hercule Poirot: The Complete Short Stories*. 1999. HarperCollins, 2008. 291-326.
- . *An Autobiography*. 1977. HarperCollins, 2011.
- . *The Big Four*. 1927. HarperCollins, 2016.
- . *Black Coffee*. 1930. HarperCollins, 2010.
- . *The Body in the Library*. 1942. HarperCollins, 2016.
- . *Cards on the Table*. 1936. HarperCollins, 2016.
- . "The Case of the Perfect Maid." 1942. *Miss Marple's Final Cases*. 1979. HarperCollins, 2016. 79-96.
- . *Curtain: Poirot's Last Case*. 1975. HarperCollins, 2013.
- . "Death by Drowning." 1931. *The Thirteen Problems*. 1932. HarperCollins, 2016. 225-250.
- . *Death on the Nile*. 1937. Berkley Books, 2004.
- . *Dumb Witness*. 1937. HarperCollins, 2015.
- . *Evil Under the Sun*. 1941. HarperCollins, 2014.
- . *Five Little Pigs*. 1943. HarperCollins, 2013.
- . *The Hollow*. 1946. HarperCollins, 2015.
- . *The Mirror Crack'd from Side to Side*. 1962. HarperCollins, 2016.
- . "Miss Marple Tells a Story." 1935. *Miss Marple's Final Cases*. 1979. HarperCollins, 2016. 97-109.
- . *Miss Marple's Final Cases*. 1979. HarperCollins, 2016.
- . *The Moving Finger*. 1943. HarperCollins, 2016.
- . *The Murder at the Vicarage*. 1930. HarperCollins, 2016.
- . *Murder Is Easy*. 1938. HarperCollins, 2017.
- . *The Murder of Roger Ackroyd*. 1926. HarperCollins, 2013.
- . *The Murder on the Links*. 1923. HarperCollins, 2015.
- . *The Mysterious Affair at Styles*. 1921. HarperCollins, 2013.
- . "The Plymouth Express." 1923. *Hercule Poirot: The Complete Short Stories*. 1999. HarperCollins, 2008. 53-64.
- . *Postern of Fate*. 1973. HarperCollins, 2015.
- . *Sad Cypress*. 1940. HarperCollins, 2015.
- . *The Secret of Chimneys*. 1925. HarperCollins, 2017.
- . *The Seven Dials Mystery*. 1929. HarperCollins, 2017.
- . *Sleeping Murder*. 1976. HarperCollins, 2016.
- . "Tape-Measure Murder." 1942. *Miss Marple's Final Cases*. 1979. HarperCollins, 2016. 43-60.
- . *The Thirteen Problems*. 1932. HarperCollins, 2016.
- . *Three Act Tragedy*. 1935. HarperCollins, 2016.
- . *Towards Zero*. 1944. HarperCollins, 2017.
- . *Why Didn't They Ask Evans?* 1934. HarperCollins, 2017.
- Clemenson, Heather A. *English Country Houses and Landed Estates*. 1982. Croom Helm, 1985.

- Curran, John. *Agatha Christie's Complete Secret Notebooks: Stories and Secrets of Murder in the Making*. Fully revised and updated ed. HarperCollins, 2020.
- . Introduction. *The Mysterious Affair at Styles*, by Agatha Christie. HarperCollins, 2013. ix-xvi.
- Delafield, E.M. *The Diary of a Provincial Lady*. 1930. *The Diary of a Provincial Lady*. 2013. Penguin Books, 2014. 1-125.
- Keating, Peter. *Agatha Christie and Shrewd Miss Marple*. Priskus Books, 2017.
- Lethbridge, Lucy. *Servants: A Downstairs View of Twentieth-Century Britain*. Bloomsbury, 2013.
- Mandler, Peter. *The Fall and Rise of the Stately Home*. Yale UP, 1997.
- Matless, David. *Landscape and Englishness*. 1998. Reaktion Books, 2016.
- Middleton, Victor T.C. *British Tourism: The Remarkable Story of Growth*. 2005. Butterworth-Heinemann, 2007.
- Mingay, G.E. *A Social History of the English Countryside*. Routledge, 1990.
- Pumphrey, Ralph E. "The Introduction of Industrialists into the British Peerage: A Study in Adaptation of a Social Institution." *The American Historical Review* 65.1 (1959): 1-16.
- 坂田薫子 「「透明な批評」で読むアガサ・クリスティー——ミス・マーブルの履歴書（1）年齢」〔『英米文学研究』57号、2022年、21～52頁〕
- . 「「透明な批評」で読むアガサ・クリスティー——ミス・マーブルの履歴書（2）人物相関図」〔『英米文学研究』58号、2023年、1～30頁〕
- Snell, K.D.M. "A drop of water from a stagnant pool? Inter-War detective fiction and the rural community." *Social History* 35.1 (2010): 21-50.
- Sugg Ryan, Deborah. *Ideal Homes, 1918-39: Domestic Design and Suburban Modernism*. Manchester UP, 2018.
- Thompson, F.M.L. *English Landed Society in the Nineteenth Century*. 1963. Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Tinniswood, Adrian. *A History of Country House Visiting: Five Centuries of Tourism and Taste*. Basil Blackwell, 1989.
- . *The Long Weekend: Life in the English Country House, 1918-1939*. Basic Books, 2016.
- . *Noble Ambitions: The Fall and Rise of the English Country House after World War II*. Basic Books, 2021.
- Turner, E.S. *What the Butler Saw: Two Hundred and Fifty Years of the Servant Problem*. 1962. Penguin Books, 2001.